

【高瀬 直先生抄録】

咬合器の現状と今後の展望を考察する ～全調節性咬合器からバーチャル咬合器への変遷～

かつてはナソロジー全盛期、顎運動再現装置として誕生したナソロジカルインスツルメント（全調節性咬合器）は臨床の現場から席を譲り、メカニカルな咬合論は生理学的な咬合論へと変化していった。近年ではデジタルデンティストリーが主流化し、ME 機器による顎運動記録も多様化していることから、その傾向はより顕著になってきていると思われる。IOS（Intraoral Scanners）の普及拡大に伴う歯科技工作業のモデルレスも最早稀有たるものではなく、顎運動計測装置と IOS、CAD の併用による補綴装置製作は、今後の補綴治療における主流を担うであろうことは容易に予測できる。

しかし現状、顎運動計測記録を CAD へインポートしたのみでは、補綴装置への精密な咬合付与は未だとして難しい心証がある。

特に 10～30 μm 閾値の精度を要求される歯冠加工では、従来の咬合器を利用した術式と比して課題が残されているものと思われる。

そこで今回は従来の咬合器を利用したアナログ技工作業からバーチャル咬合器を活用したデジタル技工への変遷に触れつつ、今後の展望について考察したい。